

1ヶ月児の泣きに対する母親の反応: [第2報] 困難さの感情・情動とその関連要因

著者	田淵 紀子, 炭谷 みどり, 竹中 友恵, 久司 留理子, 青木 洋子, 広中 啓子, 近藤 美佳, 松山 栄子, 下牧 朋子
雑誌名	日本助産学会誌 = Journal of Japan Academy of Midwifery
巻	14
号	3
ページ	164-165
発行年	2001-01-01
URL	http://hdl.handle.net/2297/34922

doi: 10.3418/jjam.14.3_158

46. 1ヶ月児の泣きに対する母親の反応

—第2報 困難さの感情・情動とその関連要因—

金沢大学医学部保健学科 ○田淵 紀子 炭谷みどり
公立能登総合病院 竹中 友恵
公立松任石川中央病院 久司留理子
七尾看護専門学校 青木 洋子
石川県立中央病院 広中 啓子
国立山中病院 近藤 美佳
福井社会保険病院 松山 栄子 下牧 朋子

I はじめに

我々はこれまでに児の泣きに対して母親がどのように受けとめているのかを質的に探り、児の泣きに対する母親の反応を報告してきた。1ヶ月児の泣き声を聞いた時の母親の感情・情動反応については、初産婦が経産婦より非受容的な情動反応を示していたことを明らかにしてきた。また、1ヵ月時点での児の泣きに対する母親の困難感の実態を第1報で報告した。困難感を感じている母親は、経産婦に比べ初産婦の割合が多かった。そこで、本研究では困難感を感じている母親がどのような感情・情動反応を示しているのかを明らかにすることと、その感情・情動反応に関連する要因と影響力、およびその要因の背景を明らかにすることを研究目的とした。

II 方法

1. 調査期間：2000年6月～7月

2. 調査対象：石川・福井県内の病産院にて出産し、1ヵ月健診に訪れた母親

3. 調査方法：研究目的および調査回答が健診及び医療者の対応等に影響しない旨の説明を行い、調査の協力に同意の得られた母親に自己記入式質問紙調査を配付し、回答後一括回収した。

1) 調査内容

(1) 児の泣き声を聞いた時の母親の感情・情動反応：児の泣き声を聞いた時、いとおいと感じる時の情動や負担に感じる時の情動（かわいい、うれしい、何かしてあげたい、イライラする、辛くて泣きたくなる、不安になる等）20項目について想起してもらい、‘1.ほとんど思わない’ ‘2.どちらかといえば思わない’ ‘3.どちらかといえば思う’ ‘4.思う’ までの1点から4点までの4段階リッカート尺度により得点化した。合計

得点は最小20点～最大80点となり、低いほど非受容的情動傾向を示す。

(2) 母親の感情・情動反応に関連する要因：母親の感情・情動反応に関連すると思われる母親の睡眠・授乳状況、サポート状況など15要因57の質問項目を設定し、母親の主観的評価によって表わされるよう4段階のリッカート尺度とし点数化した。

2) 分析方法

(1) 母親の感情・情動尺度による得点（以下、情動得点）を困難感を感じている母親（困難群）と困難なし群で一元配置分散分析により比較し、有意差検定はFisher's 検定を行った。

(2) 情動に関連する要因をPearson's 相関係数から求め、関連する要因の各々の影響力の強さをみるために、有意な相関を認めた要因の各々を独立変数に、情動得点を従属変数として重回帰分析を行った。要因に関連する背景はPearson's 相関係数を求めた。統計解析はStatView.Ver.4.02Jを用いた。

III 結果

1. 対象の概要：

調査用紙は763部配布し、654名から回収（回収率85%）、有効回答は623名であった。

2. 泣き声をきいた時の感情・情動反応の実態

感情・情動尺度のCronbach's α 係数は、0.92であった。母親全体（ $n=623$ ）での情動得点の平均は 62.97 ± 10.0 点であった。困難群の母親（ $n=110$ ）の情動得点は 55.25 ± 9.15 点で、困難なし群（ $n=72$ ）の 69.35 ± 8.02 点に比べ有意に低く（ $p < .0001$ ）、困難群の母親は非受容的情動傾向にあることが明かとなった。そこで、非受容的情動に関連する要因を明らかにするため、情動得

点の平均-1 SDを、非受容群 (n=102, 情動得点 47.28±4.71 点)) とし、情動得点に関連する要因を相関係数から求めた。

3. 非受容的情動に関連する要因

母親の非受容的情動に関連していた要因は、「泣きの性質」、「泣きのサイクル」、「夜間の授乳状況」、「母の健康状態」、「睡眠と満足度」、「サポート満足度」、「泣きへの適応」、「生活の変化に対する思い」、「育児感」、「育児の自信」、「育児の見通し」「ゆとり感」(相関係数0.254~0.471, $p < 0.05 \sim 0.0001$) があげられた。次にここにあげられた12要因で重回帰分析を行った結果、非受容的情動には図1に示すように「サポート満足度」、「夜間の授乳状況」、「生活の変化に対する思い」の3要因で全体の34.3%が説明された。すなわち、非受容的情動はサポート満足度が低い、夜間の授乳回数が多く、夜間授乳に困難感を感じている、生活の変化に対し自分の時間がなくなる、想像と現実の生活にギャップを感じている母親に見られる傾向があった。

さらにこれらの要因ごとに関連している背景を分析したところ、3要因に共通して関連していたのは「母親の健康状態」であった。その他それぞれの要因と「出産回数」、「育児経験」、「睡眠と満足度」、「寝入りの状況」、「泣きのサイクル」、「泣きの性質」が相関関係にあった(図1)。

IV 考察

非受容的情動に最も影響力の強かった3要因に共通して「母親の健康状態」が関連していた。母

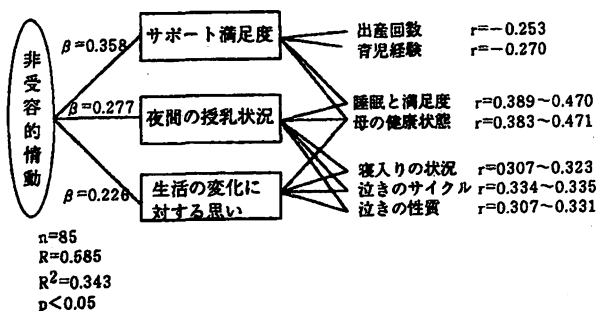


図1. 非受容的情動に影響する要因とその背景

親の体調不良や疲労感、落ち込んだ気分などがあると、自分の健康状態を維持することで精一杯の状況に育児が加わり、生後1ヶ月では夜間授乳も必至であることから夜間授乳困難感を生じさせる結果となりうる。そればかりか、経産婦の場合には上の子の育児も加わり、相当の負担となることが考えられる。そのうえ経産婦は、期待するサポートや精神的な支えに満足していない状況が浮き彫りにされている。また児がよく泣く、泣き続ける、泣きのサイクルが一定しない、寝つきが悪く寝たと思ってもすぐ覚醒し泣き出す状況は、夜間の授乳回数とも関連して、夜間授乳の困難感をもたらすとともに母親の睡眠と満足度を低下させ、健康状態をも脅かすことになる。またこのような児の泣きに対し自分の時間がなくなったというゆとりのなさや想像と現実との生活にギャップを感じる傾向が明らかにされた。以上のような状況が児の泣きに対して非受容的な情動を生じさせる要因と考えられた。これまでの分析から図2に生後1ヶ月児の泣きに対する母親の困難感と非受容的情動に関連する要因の関係を示した。今回の分析では、困難感と非受容的な情動との関連をみたにすぎず、因果関係については今後の課題である。

V 結論

- 1) 困難感を感じる母親の情動反応は非受容的な情動反応であった。
- 2) 非受容的な情動反応に関連する要因は「サポート満足度」、「夜間の授乳状況」、「生活の変化に対する思い」が最も影響力をもっていた。

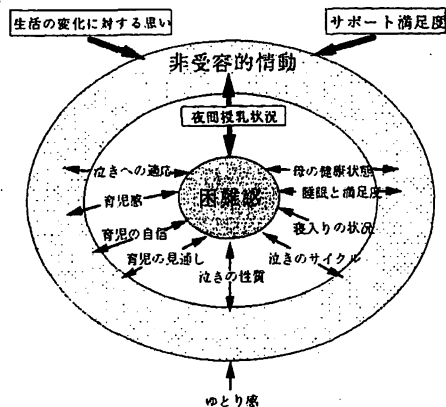


図2. 困難感と非受容的情動に関連する要因の関係